河村による学級状態の類型について
――Bionの集団理論に基づく一考察――

平　尾　浩　子*

On Kawamura's class condition typology: A point of view based on Bion's group theory

Hiroko Hirao

要　旨

現在学校現場では、いじめ、不登校、学級経営が立ち行かなくなる学級崩壊に加え、最近はインターネット社会における匿名の心理的いじめが大きな問題として、社会問題にまでなっている。今後これらの学校の問題については、おきてから個別に対処する方法ではなく、学級の中で子どもに真の生きる力を育て、それらの問題が起きにくい学級集団作りを目指すべきである。そのため本稿では河村による学級状態の類型（満足型学級、管理型学級、なれあい型学級）について、Bionの集団理論における基本的概念（依存基底的想定、闘争・逃避基底的想定、つがい規定的想定、基底的想定グループ、作動グループ）を導入し学級集団の状況を整理し深く理解するための考察を行った。

Key words：基底的想定グループ、作動グループ、満足型学級、なれあい型学級、管理型学級

Ⅰ．問題

最近子どもたちの間で、インターネット社会におけるいじめ事件が多発している。現在、携帯電話やパソコンを使った掲示板やブログ、電子メールにより、匿名で他人を誹謗、中傷する卑劣な心理的いじめが増加している。大人の知らない間に、「学校裏サイト」などの功名に仕組まれた闇のたまり場で、子ども達の心が踏みにじられ、切り裂かれている。このような事態に大人はうろたえ、おろおろするばかりである。もはや大人は子どもを守りきれないところまできている。

大人は子どもたちに、匿名なら何をしてもいいと教えてきてしまったのだろうか。昔は、「お天道様に顔向けできないようなことをしてはならない」などという人が生きてゆくための核になるもの、倫理感、しつけ方があった。太陽は暖かく柔らかな力で、大地や人を守り育んでくれる。だからこそ、その偉大な力に対し、顔向けできないようなことをしてはならない。誰も見ていないと思っていても、偉大で見えないもの（太陽、神など）が必ずどこかで見ているという教えが、

平成19年9月28日受理　*兵庫県スクールカウンセラー

悪事や犯罪を抑制する力としてはたらいていていた。しかし科学が進みそのような抑止力が機能しなくなった現代の子どもたちに、人としてどう生きてゆくのか、生きるためにはどうあるべきなのかについて、学校は、家庭は、社会は、これまでどのように教えてきたのだろうか。「生きる力」とは、「人を憎み、蹴落とし、自分が優位に立ち、生きるための力」ではないはずである。

直ちにこのような愚かさに満ちた状態に適切な介入がなされ、学校や学級は子どもたちが安心して成長できる集団になるべきである。もはや、いじめや不登校、学級崩壊などの学校の問題は起きてから対処するのではなく、それらの問題が起きにくい学級作りを目指すべきである。子どもたちが、学級という枠をはずれても、一生涯その人の中心をなす核を持った人間らしい人間が育つ学級作りがなされなくてはならない。それなくしてインターネット問題が減少・解決につながる方法がないように思われる。

河村（2007a）や高旗ら（2002）は、子どもの心を育てる上で学級集団の力が重要であり、学級に良好な人間関係を育成することが子どもたちの相互作用を促し、学校問題を発生しにくくすると指摘している。さらに河村（2007b）は子どもたちの不適応は本人の問題だけでなく、学級集団との関係性が重要であるとし、学級の状態を把握する「学級集団アセスメントQ－U」を開発し学級経営に活かしている。本稿の目的は河村が分類した学級状態の３類型を、Bionの集団理論を用いて考察することである。

W.R.Bionは英国における集団精神療法の先駆者といわれる、精神分析家である。彼は第二次世界大戦中に軍の精神病院リハビリテーション・センターにおいて、兵士の治療のために数百人からなるセッションを組織し管理したが、この経験を土台として、ロンドンのTavistock Clinikにおける小集団を対象にした集団療法のなかでBion独自の集団論を体系化していった。Bionの集団理論における概念は治療グループのみならず、社会におけるさまざまな集団を理解するために適用することができる。Hafsi（2004）は、「Bionによれば、愚かさは、人間のグループ固有の要素であり、グループがその影響によって、社会的・物理的環境を創造したり、破壊したりする」と述べ、Bionが、グループの愚かさに「基底的想定グループ」と名前をつけることにより、我々に愚かさに気付いたり理解したりする機会と理論的かつ実践的な道具を提供してくれたとしている。

本稿の目的は河村（2007b）の学級状態の３類型を、Bionの集団理論を用いて考察することにより、学級集団の情緒的状況を深く理解しようとするものである。

手順としてはまず、河村の学級状態の３類型について述べ、背景理論を紹介する。次に、学級の状況をBionの集団理論に基づき考察する。

Ⅱ．河村による学級状態の3類型

河村（2007b）は、子どもたちの問題について、学級集団という環境要因との関係性が大きいことに早くから着目、Q－Uという学級集団アセスメントの質問紙を開発し、学級集団の状態を把握し、学級経営に活かしている。彼はQ－Uにより、学級集団の状態を、満足型学級、管理型学級、なれあい型学級の３つに分類した。ここで３つの型についてそれぞれの特徴を河村（2007b）

に基づいて記述してみよう。

A満足型学級とは、学級の殆どの子どもが学級生活に満足している状態である。教師の特徴としては、学級では指導と援助をバランスよく行い、学級や子どもの実態に即して、良いタイミングで効果的にそれぞれの対応を行う。学級内の特徴としては、学級で気持ちよく過ごせるためのルールが定着し、親しい人間関係（教師と子ども、子ども同士）が形成されているため、積極的に子どもどうしがかかわり合い、クラス全体は活気や笑いがあり、いじめや不登校が少なく、多くの子どもが学級に満足している状態である。

次にB管理型学級はその特徴として、子どもたちは学級に満足している者と、学級ではあまり認められないため意欲の低い者との両者に別れ、教師は、規則や規律を重視した一貫して厳しい指導に傾きがちで、子どもの気持ちに配慮する面が弱いという点が挙げられている。学級の様子は、集団生活のルールは定着しているが、認められていると思う子と、そうでない子に別れ、意欲に差が出る。クラスは一見して落ち着いて静かであるが常に教師の評価を気にする、活気のないクラスとなる。子ども同士の人間関係も希薄である。

Cなれあい型学級は、学級生活満足群の子どもと、自己中心的でトラブルを起こしがちで被害者意識の強い子どもの両者で構成される。学級経営は友達感覚で行われるため、雰囲気は元気でのびのびしていて一見満足型との区別がつきにくい。教師の特徴は、物腰がやわらかく優しい印象で子どもたちから慕われ、教師と子どもの一対一の関係が重視されるが、そのため子ども同士の関係づくりやルールの定着がおろそかになるというものである。

Ⅲ．背景理論

上に述べた河村による学級状態について、個人に注目するのではなく、集団の状況を全体として考察することにより特定の事実に新しい意味を持たせることができる。これらの現象についてその関係を見たとき、A満足型は、Bionの集団理論における作動グループであると考えられる。またB管理型とCなれあい型についてはBionの集団理論における基底的想定に支配されている状態が考えられる。

さてここでBionの集団論について簡単に述べてみよう。

Bionの集団理論

まず背景となるBionの集団論における基本的概念について述べてみたい。Grinbergら（1977）によれば、Bionは「多数の人間が集まって一つの課せられた仕事をやり通そうとする時に、二つの方向が生ずる。1つはその仕事の成就を指向し、他はその反対を指向する。作業はより退行的、原始的活動のために妨げられる」（p.16）とし、さまざまなグループにおいてみられる、これらの2つの対照的な機能的水準に、次のような特殊な用語を導入した。前者に作動グループ、後者に其底的想定グループであるが、Bion（1961）はこの用語に関して、それにたずさわる人を意味するものではなく、特殊な精神活動を包括するものであることを強調している。

作動グループ　Work group

作動グループWork groupは、Bion（1961）によれば「この活動への参加は、幾年もの修練をもち、精神的に発達を可能にする経験を積む能力を持った人にのみ可能である。この活動は課題に向けられており、現実と関連を持っている。その方法は合理的であり、したがって、いかに萌芽的な型にせよ科学的である。」（P.137）としている。さらに集団が作動グループに関与するためには、各人の非常な努力と協力が必要であり、そのため作業を中心とした成員の共同cooperationは不可欠であり、活動は課題に向けられているため常に現実を意識し、合理的な方法がとられるということである。また作動グループは欲求不満に耐えることができるので、新しい理念の進展が可能となる。

其底的想定グループ　basic assumption group

其定的想定グループbasic assumption groupとは、Bion（1961）によれば、基底的想定と呼ばれる、強力な情緒的衝動によって形成されるグループであり、この基底的想定によって、グループがとる機構や課題などへの対処法が決定される。この基底的想定グループに関与するための条件として各個人の協力や能力は必要とされないが、代わりに原子価valencyが必要である。原子価とは、集団的な性格をもった自発的・無意識的な機能であり、人間のパーソナリティの中に存在するものである。基底的想定の活動に関与している個人個人の意思はなく、その時のメンバーやリーダーの様子を、Bion（1961）は、Lebonを引用しながら「自分の意思によって導かれることを停止した自動人形」（P.171）と表現している。

其底的想定グループは原始的な部分対象に密接に対応しているため、原始的な関係に所属する精神病的不安が現れてくる。このため基底的想定グループにおいてはMelanie kleinの記述による早期の精神病的（特に妄想分裂的）態勢における防衛課程（原始的理想化、分裂、投影同一化、否認）によって特徴づけられる（Klein, 1955; Segal, 1973）。

規底的想定は、Bion自身の経験に基づき「依存基底的想定」「闘争/逃避基底的想定」「つがい基底的想定」の３つに分けられる。

・依存其底的想定　basic assumption of Dependency（baD）

Bion（1961）によれば、baDの特徴はグループが「物質的・精神的な援助や保護のために依存しているリーダーから支持を得ようとして会合する」（p.141）。従ってグループは未熟で非力な存在であり、有能なリーダーに頼らなければ自身では何もできない「かのように」ふるまう。baDの特徴としては、外界は非友好的で冷たいものであると感じること、リーダーの理想化（全知、全能化）、批判的判断の欠如と受け身性、極端に貪欲（greedy）な方法で知識、援助を要求、個人間相互作用の欠如などがあげられる。

・闘争・逃避其底的想定　basic assumption of Fight/Flight（baF）

Bion（1961）によれば、闘争と逃避は、「集団が何者かと闘い、あるいは何者からか逃避するために会合する」（P.147）という常に内・外の敵を意識したグループの信念であり、一般には正

反対の行動であると理解されるこの二つについて、同一のコインの表と裏のように考え、悪い対象に対する唯一の防衛的活動として、それを破壊する（闘争）か（逃避）という行動を起こすと説明した。したがってbaFの第一の特徴は、グループ内・外における敵（scapegoating）の存在であり、グループの闘争的な側面としては疑惑、非難、言語的攻撃、怒りであり、逃避的な側面としては、受身的抵抗、沈黙、、集団の作業の回避があげられる。baFグループにとって必要なことは集団が生きのびることであり、そのためには個人を犠牲にすることがある。グループは逸脱者が出ることを脅威と感じるため、個人が順応するように圧力をかける。逸脱者に対してグループは、攻撃的な操作とスケープゴーティングによって逸脱を阻止しようとする。

・つがい其底的想定　basic assumption of Pairing（baP）

Bion（1961）によれば、baPグループにおける最大の特徴とは「希望的な期待」を持つことであり、たとえば「結婚が神経症状を終結させるであろう…来るべきシーズンには…より快方に向かうであろう…」（p.145）というように言語表現されるものであるとしたうえで、「要点は、将来の出来事ではなく、直接の現在であり、希望の感情そのもの」（p.145）であり、この感情が出現していれば、それだけで対集団である証明とみなされるものであるとした。この「希望」はしばしば二人のメンバー（つがい）に託される。グループは自らが抱えている不安や恐怖を解決してくれるであろうリーダー（救世主＝必ずしも人間とは限らない）を生んでくれるであろうという希望的な期待を抱き、つがいの話にじっと耳を傾けるのである。このためグループの雰囲気は他の基底的想定とは違い幸福感や楽観、親しみのある明るいものとなる。

Ⅳ．考察

考察に入る前にまず、表１のように、Ａ満足型、Ｂ管理型、Ｃなれあい型の学級の詳しい状況について（河村2004・2007b）に基づいてそれぞれ分類、整理した。

次に表１に照らしあわせながら、各類型別にBion集団理論による考察を行いたい。

Ａ満足型学級

表１に見られるように、満足型学級では「ルール（対人関係、集団活動、生活をする際のきまり）とリレーション（互いに構えのない、ふれあいのある本音の感情交流がある状態）」（河村2007b）がバランスよく成立し、子どもの不適応が少なく、不登校やいじめの発生率が少ないうえにさらに互いに学びあい、高めあうことができるので、学力も定着しやすいという状態である。このように、グループの基本的作業に集中している傾向、グループ機能とその特有の心的側面により、満足型学級は、Bion集団理論による作動グループWork group（ＷＧ）の状態であるといえる。

ＷＧと基底的想定グループ（baG）の関係についてHafsi（2004）は、グループの存続や発達のためにＷＧが不可欠ではあるものの、常にグループがＷＧ活動の条件を満たしている訳ではなく、ＷＧになるためには大変な苦痛を伴うために、グループはそれを回避しようとする。その際

にグループはＷＧと共存するbaＧに頼ることになり、その結果baＧはＷＧを阻止し、両グループの間に「勝ったほうがグループを支配する」という力関係が成立するとしている。

Ｂ管理型学級

表１に示されるようにこの学級の状態は、教師が指導重視のため、子ども同士の関係は希薄で、ルールは高いがリレーションが低い状況となり、個より全体を重視した状況が色濃くなってくる。また認められない側の不満や、普段から抑圧されているための不満などが、低い階層への陰湿ないじめとなることも考えられる。このような管理型の状況は、Bionによる闘争・逃避基底的想定basic assumption of Fight/Flight（baF）に支配されている状態であることが言える。

baFグループにおいて重要なことは、グループ全体であり、グループの存続のためには個人を犠牲にする場合がある。グループにとって、個人に自由を与えるとメンバー間の意見相違などにより、グループ内に争いが起きるのを脅威に感じるからである。これについてHafsi（2004）は、グループは、このようなグループ内の葛藤や戦いはグループを全滅に導く可能性があるので、支配的な「考えに対するいかなる抵抗をも許すことができない」（ｐ.31）とKernberg（1980）を引用しながら述べている。

さらにHafsi（2003）は、baＦグループにおける沈黙については、「『なぜ我々は協力する必要があるのか、あるいはしなければならないのか』といったグループによる疑問や不満として表現される…」（P30.）抵抗的な機能があると指摘している。またリーダーに期待されることとしては、個々の反応の無視や、グループ全体の存続のために全力を尽くすこと、勇気や自己犠牲、敵に対する憎しみの促進などを挙げている。

Ｃなれあい型学級

この学級の状況には、表１にみられるように、いくつかの側面が含まれる。まず、援助重視の優しい教師に世話されるのを期待するような、教師と子どもの関係がみられる（子ども同士の相互作用はない）という側面は、Bionの集団理論による依存基底的想定　basic assumption of Dependency（baD）によるものと考えられる。また友達感覚の一見自由で和気藹々とした雰囲気や、教師が子ども一人一人と１対１の関係を重視する側面は、つがい基底的想定basic assumption of Pairing（baP）によるものと考えられる。（baP）については、広辞苑（2008）によれば「なれあい」という言葉には「なれあい夫婦の略」という意味もあることから、「つがい」を連想することが容易である。よって、なれあい型にはbaDとbaPの二つのタイプの基底的想定が含まれていると考えられる。

Hafsi（2003）は、baＤグループにおけるグループの共通幻想とは、グループ内に、養育したり供給してくれる万能的リーダーが存在するというものであり、baＤの影響下にあるグループは、無力感、低い自己評価、モチベーションの低下などの心的状態に陥り、グループの形式・非形式リーダー等の人物を理想化し、貪欲に彼らに頼っていくことになるとしている。さらにHafsi（2003）はbaＤグループにおけるグループとリーダーの関係について「寄生的…であり、Melanie kleinに記述された対象に対する理想化によって、グループは、リーダーが全知的および万能的

表１．河村の学級集団の類型別状況

クラス内の状況		A満足型	B管理型（指導タイプ）	Cなれあい型（援助タイプ）
教師に関するもの	教師の重視するもの	ルールとリレーションの確立	規則・規律　厳しい指導 教師の権力で上の位置から指導する。教師が想定した集団の規律の枠に入れ込もうとする。	教師と子ども一人一人との関係
	子どもへの指導と援助のバランス	程よい指導と援助	指導＞援助	援助＞指導 友達感覚の学級経営
	教師の不得意な部分	特になし	子どもの心情に配慮すること。 教師と子どものリレーションの形成	子供同士の人間関係作り・ルールの定着 教師役割を前面に出した指導（明らかな逸脱行動も強く指導できない）
子ども側のもの	子ども同士の関係	積極的に関わりあう	希薄	親しい人間関係が形成されていない。トラブル多発（小グループが多数生まれる
	子どもの教師への気持ち	信頼度が高い	教師の評価を気にする・不満をぶつけられない	慕う・やさしいと感じる
	自分はクラス内でどう思われているか	自分は認められている・居場所がある	承認感の高い子と低い子がいて差が大きい	
学級全体について	ルール	定着	定着	あまり定着していない
	雰囲気	活気、笑いがある	一見落ち着いて静か 受身的、シラッとして活気がない	元気でのびのび
	授業時の様子	互いに学びあい高めあう	意欲は高くないが淡々と授業が進む	一見自由で和気藹々。しかし私語多く勉強に集中していない。イベント等の楽しみは共有するが、互いに切磋琢磨する方向には向かわない
	学力	学力の定着度が高い子どもが多く、ぐんぐん伸びる	格差の広がり 学習意欲にバラつきが大きい。出来る子と出来ない子が色分けされる	学力の定着度が低い
	いじめ	B,Cに比べ数は少ないが発生している	教師の目の届かないところで陰湿ないじめが横行するおそれが高い 普段抑制されているため子ども達のストレスは高くなっている。そのため低い階層に位置づけられた子へのいじめでストレスを発散している場合がある。	誰もがいじめの対象になる可能性が高い。グループの対立が起きている場合、グループ内で目立つ子がいじめの標的にされる（グループへの忠誠心から同調していじめが行われる） いじめの発見が難しい（いじめの半分以上を把握できていない）
	学級崩壊	起こりにくい	教師への鬱憤が子どもの間で発散され（けんかや争い）、教師の権威の象徴であるルールを破ることで反抗する子どもが出てくると学級のルールが急激に崩れ、グループで固まって教師に反発⇒崩壊へ	集団を束ねるルールがつくられていない、くずれがどこから始まるかわからない、荒れはじめると教師は子どもたちに指導力を全く発揮できない⇒崩壊に向かって一気に進む恐れがある。

な存在、つまりグループについて何でも知っている、グループの問題に対する解決方法を知っている、グループの体験による不安や恐怖に耐える能力をもっている人であると確信している。したがって、グループはリーダーの、グループの依存的要求に対する拒否を、能力の欠如によるものではなく、リーダーのグループに対する無関心や『愛情の無さ』の結果としてみなしてしまう」（p.25）としている。

baPグループについて、Hafsi（2004）は、グループがbaPの影響下にあるための特徴として、つがいという二者関係（必ずしも男女である必要はない）の存在、親しみ、過度な幸福感、楽観主義に満ちたグループ雰囲気や未来への強い関心や希望と期待をあげているが、未来への関心については、今、ここの作業とは関係なく、救世主・リーダーの誕生への漠然とした幻想的な期待と希望に基づく感情にすぎないものであり、作動グループのときに見られる未来志向の行動や思考とは異なることを指摘している。

さらにbaPについてHafsi（2003）は、「グループにおけるつがいの任務は救世主・リーダーを創造する、あるいは『産む』ことである。無意識的にグループは、二人の“魔法的な”「性的」関係によって産まれる救世主・リーダーを待ちながら、二人に注目したり、支持したりするような基底的作業に没頭するようになる。」（p.33）しかしグループが実際に救世主の誕生を望んでいるのではなくbaPグループの活動の目的はその希望の実現ではなくそれを持ち続けることである。希望の実現は希望の喪失と同等であるので希望は決して満たされてはならないとしている。

V．まとめ

本稿において、河村の学級状態を類型別にBionの集団理論により考察した。まず背景となるBionの集団理論について紹介し、河村の分類による学級状態について検討を試みた。即ち、A満足型については、指導と援助のバランスや、ルールとリレーションの定着も良く、親しい人間関係が形成され、クラスは活気や笑顔があふれ学力の定着も良く全体の満足度も高い状態であるため、この状態は作動グループの状態であることが言える。満足型学級は、作動グループに参加するために不可欠である、メンバーの共同（cooperation）が可能であり、欲求不満に耐え、現実原則に基づく活動が可能となるためである。

B管理型学級については、規則や規律重視の厳しい指導に傾き、ルールは定着しているが生徒同士の関係は希薄で、子どもの意欲や承認感に差があり、常に教師の評価を気にするという状態であり、この状態は闘争・逃避基底的想定に支配されている状態であるといえる。管理型学級は、個より全体を重視し、メンバー間の意見相違がグループの全滅に導くことを恐れ、グループ全体の存続のために全力を尽くすことなどが求められる闘争・逃避基底的想定の状況を満たしていると考えられるからである。

Cなれ合い型学級に関しては、二つの側面が見られる。援助重視の優しい教師の助けが必要な側面に関しては、リーダーへの理想化など、早期の妄想分裂態勢特有の破壊的防衛課程によって特徴付けられる依存基底的想定に支配されている状態であるといえる。また自由で和気藹々とした雰囲気の中で、1対1の関係を重視するという側面に関しては、それらを重視する、つがい基

底的想定に支配されている状態であると考えられる。

本稿では、最近のインターネット社会によるいじめ問題など学校の諸問題の予防・解決のために、子どもたちを、人を憎み蹴落とすための生きる力ではなく、人間らしく生きるための真の力を持った子どもに育成するための学級集団作りが急務であり、現在の学校における学級の状態についてより広く深く理解するために、Bionの集団理論の概念を用いて考察した。

Hafsi（2004）がのべているように、今後はグループが、愚かさに費やしていたエネルギーを、建設的な心的活動や「作動グループ」のために費やさせるように、その愚かさ（基底的想定）を中立化することが重要である。そのため今後の課題としては、学級の事例にあたり、学級集団の状況に対しての観察、Bion集団理論からの分析をさらに進めたい。

参考文献

Anzieu,D.: *Le groupe et Imaginaire groupal.Paris: Bordas*, 1984.（榎本譲訳：集団と無意識、言叢社、1999）

朝日新聞社会部（1999）：学級崩壊　朝日新聞社

Bion,W.R.: *Experiences in groups and other papers*. New York: Basic Books, 1961.（池田数好訳：集団精神療法の基礎、岩崎学術出版社、1973）.

Hafsi,M.: The leadership function in training groups: A psychoanalytical approach to group dynamics. *Psychologia*, 33,230-241. 1990.

Hafsi,M.（2003）：ビオンへの道標　ナカニシヤ出版

Hafsi,M.（2004）：「愚かさ」の精神分析　ビオン的観点からグループの無意識を見つめて　ナカニシヤ出版

今泉博ら（1998）：なぜ小学生が荒れるのか　太郎次郎社

河村茂雄　山崎隆夫.（2004）：Q－Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイドー中学校編－図書文化社

河村茂雄・柏谷貴志.（2007a）：公立学校の挑戦　図書文化社

河村茂雄.（2007b）：データが語る①学校の課題　図書文化社

Klein,M.: Notes on some schizoid mechanisms. In *Developmentu in psychoanalysis*. London: Hogarth Press, 1955.

Lebon,G.: *The Crowd:study of the Popular Mind. London*: Benn, 1947.

日本能率協会総合研究所（2006）：日本人の子育て・教育を読み解くデータ総覧2006　三陽社

尾木直樹（1999）：「学級崩壊」をどうみるか　日本放送出版協会

産経新聞（2006）：学級崩壊　先生、子供の友達感覚が招く「なれあい型」急増. 10月13日.

Segal,H.: *Introduction to the Work of Melanie Klein*. London: Hogarth Press, 1973

高旗正人・相原次男（2002）：「生きる力」を育てる教育へのアプローチ　黎明書房

新村　出編（2008）：広辞苑第6版　岩波書店

読売新聞（2006）：なれあい学級でいじめ多発、長期被害は小学生の3.6%. 12月5日.